

---

# 小さな翼と記憶喪失の少女

アルテミス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな翼と記憶喪失の少女

### 【Zコード】

Z3976BA

### 【作者名】

アルテミス

### 【あらすじ】

海底リクリクスで目を覚ました少女リオ。彼女には記憶がなく、自分が何者なのかも覚えていなかった。

時を同じくしてリクリクス内に閉じ込められた少女エミリア。二人が出会った時、運命の歯車が回り出す。

## Act・1 三覚め（前書き）

はじめまして、アルテミスと申します。  
小説を書くのはこれが初めてとなりますので、拙い部分が多くある  
かもしれません。よろしくお願いします。

ふと、目が覚めた。

しかし、目が覚めても周りは真っ暗のままで自由に身動きも取れなかつた。辺りを触つて調べる限り、どうやら人ひとりに入る程度の大きさの箱のようなものの中に閉じ込められているようだつた。

手探りで周りを調べると側面の、ちょうど顔の近く辺りに一つと反対側にもう一つ、スイッチのようなでっぱりがあつた。

片方を押してみるが何もなく、もう一方も同じだつた。今度は両方も押してみる。すると何か起動音のようなものが聞こえ、プシューといふ空気が抜けれる音とともに徐々に目の前が開けていく。上体を少しづつ傾け、周囲を確認する。

「ここは……一体」

立ち上がり周りを歩いてみるとそこは一面、青一色の場所で壁面からは水が流れ落ちていた。なんとも幻想的だが自分には見覚えの無い場所だつた。……自分？あれ？ そういえば、自分の名前は……

「私の名前……！？」

「思い……出せない！？」

いくら思い出そうとしてもポツカリと穴が空いたように記憶が欠落していた。私は一体何者で、なぜここにいるのだろうか？

「……そうだ！」

自分が閉じ込められていた箱！もしかしたら、何か手掛けがありかもしない。

脱出した時は確認していなかつたがそれは箱と呼ぶにはあまりにも無粋なものであり、例えるなら……そう、柩とも呼べる豪華な装飾の入つた代物だつた。なぜ、自分はこのようなものに入つていたのだろうか？そんなことを考えていると柩の下部に何か文字が入つているのが見えた。

「リ……オ？」

おそらく人の名前であり柩に入る人のものだろつ。ということは、自分の名前を指しているのだろうか。とりあえず名前がないのはいろいろと不便なのでリオと名乗ろうと思つ。

さらに調べてみると柩の中に何かあるのを見つける。

それは左右非対称の双手剣で鍔に『百花繚乱』ヒャッカリョウランと刻まれていた。

どうして自分と一緒に中に入つているのか？それに……なぜだろつ、不思議とこの剣、使い慣れていたような気がする。手に取り何気なく一振りしてみる。うん。やっぱり、なんだか自然と手に馴染む。柩の中にはもう何も無くどうやらこれだけのようだつた。

「そもそも、別の所も探索したほうがいいかな？」

とりあえず、いつまでもこんな所でくすぶついててもしよつがない。ここで待つという手もあるかもしけないが助けが来る保証はどこにもないので行動したほうがいいだろつ。

「さて……」

今こる部屋は「」で行き止まつなので扉に向かつて歩を歩か。

「…………」

扉を抜けて最初に田に飛び込んだ光景に思わず田をへらす。田の前では緑色の体をした鮫のような頭を持ち、鋭い鎌のような両手をした生物が<sup>エビルシャーク</sup>一体で同じ仲間を食っていた。共食いである。直ぐにその場から立ち去る「と後ずさるがジャリッ」という嫌な音が足元から聞こえた。しまった、と後悔した時にはすでに遅く、一体のエビルシャークはこちらに気付いていた。

一体は緩慢ではあるが確実に私に向かつてくる。

「くつ……！」ちにも武器はあるけど戦い方なんて……」

両手にあるヒヤツカリョウウランを見るがやはり、自分に戦闘など出来る訳がない。

その時、一体の内の一體が短く声を上げ、ジャンプしながら凶器のような腕を振り下ろす。

「……」

やられる…と思つたがそれよりも先に手が動き、エビルシャークの上半身と下半身を真つ二つに両断した。もう一體が間髪入れず襲いかかってくるが自分の動きとは思えないような速さでかわし、かわすと同時に後ろから首をはねる。

「今の動きは?……」

全てが終わつてハツとなるが今のは一体どうしたことだらう?自分に戦闘経験なんて……いや、記憶がないのだからなんとも言えないが……だが、これまた不思議と違和感はなかつた。むしろ今のが普通とも思えた。なぜだらう? 考えてみるがやはりわからない。

まあいい、考えても答えが出るとも思えないし命拾いしたとでも考えておくことにしよう。

そして、遠くに見える扉へと再び歩き出す。だがこの時、目指していた扉が出口ではなく入口へと向かう扉だということを彼女は知るはずもなかつた。

一方、リオが再び歩き出しているところ……

「出して、出してよーーー!」の「、」のやわらかー開きなぞよーーー。」

一人の少女が必死に扉を叩いて大声で助けを求めていた。

「……はあ。……だから帰るつづいていたのにさ。ここはやばいつて、あれだけ言つたのになんで聞いてくんないかなあ……」

明らかに落胆して一人、こちている。すると、後ろの方から物音がした。

「……誰?」

自分以外にも誰かいることに少し安心し若干の期待を込めて振り返る。

しかし、そこにいたものを見て絶望する。

「げ、原生生物！？」

そこにはエビルシャークと空中を浮遊する生物の二体だつた。タヴァラス  
対応しようにも自分は武器は持っていても戦闘訓練だけで、実戦なんてほとんどしたことがなかつた。

そんな事情を敵がわかるはずがなく（わかつたとしても襲いかかつてくるのだが……）、自分に近づいてくる。

「……うー、いつなつたら……やつてやるー！」なんといひで死んでたまるもんか！？」

そういうて自分を奮い立たせ変わつた形をしたロッヂ（クラーリタ・ヴィサス）を構える。セイバー系の武器もあるが進んで接近戦をするのは自分の力量では難しいし、第一怖い。

移動し遠距離から攻撃テクニックで攻め、やむを得ず距離を詰められたらセイバーに切り替える。頭の中で作戦を練り、実行に移す。

炎系の攻撃テクニック（フォイエ）をエビルシャークに放つ。攻撃は見事に命中し一撃で倒れる。どうやらクリーンヒットしたようだつた。

「燃えちゃえ！」

「……あれ？ 倒した……の？」

しかしこの時、少女は致命的なミスをしていた。初めて敵を倒したこと驚いていたせいでもう一体に注意が逸れていた。

タヴァラスは攻撃体勢から攻撃に移っていて、突進攻撃が見えた時には攻撃をかわす体勢ではなかつた。

「やばつ！」

目を瞑つて、衝撃に耐えようとするが中々、痛みが襲つて来ない。それどころかドサツという何かが倒れる音がした。

恐る恐る目を開けると目の前には変わつた形をした二股の剣が突き刺さつたタヴァラスが横たわつていた。

「一体、誰が?……」

ゆつくりと正面を見て敵を倒したであろう人物を確認する。

「ふう……。なんとか、間に合つた」

そこには、私より1・2歳ぐらい年上の黒髪で赤い瞳をした少女がいた。

彼女はこちらに近づき、突き刺さつた剣を引き抜いて声を掛けた。

「大丈夫？ 怪我とか、無い？」

「……えつ。あつ、だ、大丈夫、だけど……」

「そう。でも良かつた、私以外に人がいて」

ポカソとしていた私に彼女は心配そうな顔をしたが私の返事を聞い

て満足そうに微笑んだ後、入口の扉を見て尋ねてくる。

「ねえ。ちよつと聞きたいんだけど、セレの扉って開かないの？」

「へ、うん。突然閉まっちゃって。」

「セレ……。やつぱり、ちよあつた地響きのせいなのかな？ 戻らなことダメかあ」

残念そうに頭を垂れる彼女。そのまま奥に進もうと踵を返すが……

「じいこくのへ。」

「じいこく、出口を探しに行くんけど」

「まさか奥に進む気！？ 無理無理！ やだやだ！ 危ないって……、未開のレリクスなんだよ？ …… って、なんであんた奥からきたの？」

「その…… 実はね。目が覚めたらここについて、自分のこと何一つ覚えて無いの」

「え……。それってつまり、記憶喪失ってこと？」

「ええ。とりあえず、ここにいても埒が明かないから早く脱出しようと愚うんだけど。あなたは来ないの？」

少しの間、逡巡した後、行動を共にした方がいいだろうと判断し……

「ちよつ、ちよつと待つて！ 行くからーあたしもこっしょに行くー。」

急いで彼女の元に走っていぐ。まだ名前を聞いてないのを思い出したので。

「あ、そういえば名前……つていっても覚えてない、よね？」

「いや、リオよ。」

「……ふ、ふーん。名前は覚えてるんだ。あ、あたしはヒミコア。ヒミコア・パーシバル。えっと、その……これからしばらくなは一緒にだから……よ、よろしくね」

「ええ。よろしくね」

## Act · i 田覚め（後書き）

原作のセリフを結構、なぞつたりするのであまりオリジナリティを感じられないかもしませんが、ようしければ感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3976ba/>

---

小さな翼と記憶喪失の少女

2012年1月10日15時50分発行